

テモテ第一3章14-16節 「真理の柱なる教会」

1A 神の家 14-15

1B 教会

2B 真理の柱と土台

2A 敬虔の奥義 16

1B 一致した意見

2B キリストの御業

本文

今朝の箇所は、テモテへの手紙第一 3 章 14-16 節になります。

14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。15 それは、たとえ私がおそくなればあいいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

教会の多くの方が、カルバリーチャペル西東京との合同修養会に参加してくださいましたが、今朝はそこで主から受けたこと、また奥多摩における、牧師やリーダーのリトリート(修養会)で受けたことをお分ちしたいと思つています。奥多摩のリトリートは合同修養会で主から教えられたことと重なっていて、今の終わりの時代で教会を神はどこに進ませてくださっているかを、主は、はっきりと教えてくださいました。

合同修養会の主題は「山上の垂訓と教会」です。教会とは何かについて考えていく時に、私たちはこの世界というものを考えます。イエス様が弟子たちに対して「あなたがたは世界の光です。」と呼ばれましたからです。世界の中に教会があります。私たちが世で起こっていることに無関心で、サークルのような仲間内だけの気持ちの良いサロンのようになってはいけません。世というものがあって、初めて神の光が輝きます。そして、世はこの光に反対します。私たちのキリストへの信仰に反対します。けれども、キリストの弟子たちは、敵を愛して、祈り、祝福することによって、なおのこと神の国が広がっていくとイエス様は教えられます。それは、私たちの内におられる、復活の主イエス・キリストが敵を愛されたからです。

山上の垂訓において、イエス様の教えは「心の貧しい者は幸いである。」という宣言から始まりました。それは自分が空っぽである、何もないことを示すものでした。自分にある可能性が一切粉

碎されていること、自分はどうしようもなく災いであることを知ることです。しかし、キリストがその負い目を十字架の上で負ってくださいました。そして三日目によみがえってくださったのです。イエスは、聖霊によって今、私たちの中に住んでくださるのです。このキリストにあって、私たちは敵を愛することができるのです。

最後に、イエス様はこの人格的な関係のない、ただ口だけの者が終わりの日に現われることを教えました。キリストと結ばれていないのに、自分に死んでキリストだけを生きる目的とするという「狭き門」を経ないで、イエスの名を名乗る者たちが出てくることを警告しました。偽預言者の存在です。彼らは羊のような身なりをしているけれども、羊の皮をかぶった狼であると警告されました。イエス様とつながっていないので、悪い実が結ばれると言われました。

そこでテモテへの手紙第一の学びに入ることになります。テモテはパウロによって信仰を持ち、そしてパウロによって信仰的に育てられ、パウロと宣教の働きを共にしていった者です。そして若い牧者でした。まだ三十代であったのではないかとされています。その彼を、パウロが開拓したエペソにある教会に置いて、そこでテモテは牧会を始めたのです。そこにあるのは、偽りの教えでした。かつてパウロが、エペソの長老たちに、歪んだことを教える者どもがやって来るし、あなたがたの間からも出てくることを予告していました。そういった者たちが、果たして出てきたのです。

聖書に出てこない空想話や憶測によって、聖書の教えを混乱させて、論議を引き起こします。また、「これこれをしてはいけない」と言って、律法主義に陥っている者たちもいました。また、食物を断つことや、結婚を禁じるような肉体に苦行を強いることによって、霊的になれると教える者たちもいました。そして、権威者や、富を持つ者たちに反抗させるように唆す者たちもいました。教会を、金銭を得る手段としているような者もいました。自分たちこそが神からの知識を得ているという、霊的エリート主義、霊知主義がはびこっていました。本当にいろいろなことが起こっていました。

けれども、それを若い牧者テモテが取り組まなければいけないのです。そこで信仰の父であるパウロは、テモテを励まし、また命じたのです。神の救いの真理、これをどんなことがあっても保持するように命じました。「ゆだねられたものを守りなさい。(6:20)」と言いました。そこで、これは信頼に値する言葉である、とって真理の支柱となる言葉を彼に伝えたのです。それが、今読んだところでは

今朝は、いつもの詩篇の交読ではなく使徒信条を読んでいただきました。教会が全史を通じて、長年告白してきたのがこの使徒信条です。聖書の中にある句ではありませんが、聖書に書かれている、その根本真理を短く述べたものであります。この告白を、単に諳んじて口で発するのではなく、この世に生きていながら、なおのことイエスが主であり、神の御子であるという告白をして、この世に神の真理を明らかにしていったのです。各時代において、どんなに多くの人々に受け入れられ、もてはやされても、その価値観は廃れていきました。キリスト教会は、当時の権力によって迫

害されてきました。けれども、なおのこと今も教会は立っているのです。それだけ、イエスを告白するということは力があり、イエス様ご自身の言葉によれば、「天の御国の鍵を持っており、ハデス（地獄）の門もこれに打ち勝つことはできない。」ということなのです。

1A 神の家 14-15

1B 教会

15節をもう一度ご覧ください。「それは、たとえ私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」

教会の定義が書いてあります。それは、「神の家」であるということが一つです。神の家であるという認識で、どのように行動していくかを知らないといけないと言っています。神を天におられる父として仰ぐ集まりが、教会です。私、清正の家ではありません。また他の誰の家でもありません、神の家であります。イエス・キリストは、黙示録で「初めであり、終わりである」と呼ばれています。初めから終わりまで、徹頭徹尾、神ご自身であり、私たちの主イエス・キリストのおられるところ、この方の所有物が教会であります。したがって一人一人が、私たちの罪のために死なれたけれども、今は甦って生きておられるキリストに会うために、ここに呼び出されたのです。

この前の奥多摩での交わりで、ある兄弟が、彼自身牧師ですが、伝統的な日本の教会の牧会の考え方について、身近で起こっていることについて話してくれました。それは、教会では牧師の命令は絶対であり、全て自分の行なうことは牧師の指示や方針を反映させたものでなければいけない、という考えだと言います。そして人々は反動で、教会が嫌になります。このようにして神を見上げるのではなく、牧師のほうばかりを見ます。牧師につくか、反対するかという二分になるのです。これでは神の教会ではありません。そして牧師に限らず、教会の中にいる誰かについて、その人の意見や気持ちを、聖書の真理より優先させることで、教会を神ではない誰かのものにします。それではいけません。

そして、「家」であることに注目してください。この神を父と仰ぎ、イエスを自分たちの主としている家庭であります。このことだけ分かるだけでも、私たちは多くの思い煩いを降ろすことができます。私は、しばしば皆さんのことを「兄弟」とか「姉妹」とか呼びます。そこには、キリストにある一体感があります。私は韓国や朝鮮の習慣で好きなものがあるのですが、少し知り合いになると互いに、「お姉さん」「お兄さん」と呼び合うことです。それぞれが個人の生活を崩さないという悪い意味での遠慮を捨てて、同じ家族として助け合い、支え合うのです。

人間の文化の中でもそうなのですから、私たちキリスト者はなおさらのこと、キリストに結ばれて互いに仕え合い、助け合い、励まし合います。教会がしばしば、「学校」あるいは「会社」のような競争する場になってしまいます。他の人がしていることを見て、自分にはできていないとがっかりしま

す。クリスチャンがどれだけ聖書を読んだか、祈ったか、伝道をしたか、そうした活動を成績や業績のように捉えて、イエス様が学校の先生になってしまう時があるのです。どうでしょうか？そのような競争社会の中で日常を戦って、家に戻ってくると安心ですよ？教会はどちらでしょうか？前者ではなく、後者です。教会に来ると、ほっとするのです。教会に行くのではなく、教会に戻ってくるのです。そして教会から神によって遣わされるのです。

そして、「生ける神の教会」ともパウロは言っています。「教会」という翻訳は、日本語、韓国語、中国語すべてに採用されていますが、ギリシヤ語は「エクレシア」と言います。「集会」という意味で、世俗の集会にも使われていました。そしてエクレシアの元々の意味は、「呼び出される」というものです。呼び出された者たち、召集がかけられた者たち、ということです。

ここはとても大事です。教会においては、徹頭徹尾「召し」によって成り立っています。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」私たちが選ぶのではなく、イエスが選ばれるのです。だから自分ではなく、神が主体であり、自分の責任ではなく神が責任を取ってくださるのです。つまり、主から命じられているから、これこれを行っているのだという信仰が与えられていればそれだけ、何が起こっても、忍耐することができるし、あきらめずに忠実に神に仕えることができます。自分で選ぶという自分主体であれば、何か状況が悪くなれば自分主体で容易くやめていくのです。しかし、教会というのは呼ばれた者たちの集まりであり、ゆえに神中心であり、神の御霊の力によって奉仕することができるのです。

2B 真理の柱と土台



そして、パウロは、エペソにいるテモテに対して、とても分かり易い表現で教会を表現しています。「真理の柱また土台」ということです。エペソには、世界の七不思議にもなっている「アルテミス神殿」がありました。アルテミスとは女神で、エペソの人たちは熱心に拝んでいました。使徒の働き 19 章で、アルテミス神殿の模型を作っている銀細工人が、パウロの宣教によって多くの者がその偶像を捨てたので、自分たちの商売が上がったりなので騒動を起こしたのを覚えているでしょうか？そのアルテミス神殿で特徴的なのは、柱です。神殿の広さは、縦 115 メートル、横 55 メートル、そして高さ 18 メートルのイオニア式の柱 127 本から成っていました。

ですから、「真理の柱また土台」という時に、その柱は人々の目に遠くまで見える、非常に目立つ存在だったということです。私たちは、教会が真理の土台という言葉は理解しやすいのではないかと思います。ペテロがイエス様を、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と告白したら、イエス様が「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。(マタイ 16:18)」と言われました。自分の拠り所は、イエスが神の御子で、キリストであるという真理であり、この方の上に私たちは立っています。



では、「柱」という時はどうことなのか？それは、神の真理を世に対して明らかにする、ということです。隠さない、誰でも分かるようにはっきりさせるということでもあります。それが、主が語られた「世界の光」の意味です。「マタイ 5:14-16 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

私たちが、この世に対してどこまで神の真理を明らかにしているでしょうか？しばしば起こるのは、「信条としては受け入れているが、公に明らかにしていない。」という問題です。私たちが、信仰をもって真理を受け入れ、それを口に出して宣言するからこそ、生活の一部となり、血肉となります。使徒パウロが、エペソの長老たちにこう言いました。「使徒 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」私たちが、人々に受け入れられるのではないかとと思われるところだけを、その一部のみを明らかにしたところで、イエスが主であることを知ってもらうことはできません。そのご計画の全体を明らかにしていくことによって、初めてイエスが主であることを知らせることができるのです。

2A 敬虔の奥義 16

そして 16 節を読みます。「確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

1B 一致した意見

パウロが、様々な教えの暴風の中に置かれていたテモテに対して、これだけはしっかりと保持していなさいという根本真理を教えています。「確かに」というのは、直訳は「一致した意見ですが」となっています。ここに書かれているのは、教会によって意見が異なるものではないということです。意見の多様性の余地はない、これを除いたら我々の信仰そのものがなくなるということです。

そして、これが「偉大なこの敬虔の奥義」とあります。偉大な真理です。ものすごい真理です。私たちは感動をもって、神の真理の言葉を聞いているのでしょうか？この真理の言葉こそが、神の人になることのできる敬虔を生み出します。神の似姿に近づくことのできる奥義なのです。周りの人々はこれをすればよいであると言って、論議や議論の中に入り込んでいるのですが、敬虔の奥義はキリストの内にあり、初めから聞いている神の救いのご計画の中にあるのです。

おそらくここにあるのは、初代教会における短い信仰告白の信条であったのではないかと思います。かつては、新約聖書はもちろん存在しないですが、旧約聖書も一部の指導者が巻き物として持っていただけで、それをいつも手に出来た訳ではなく、それで信仰を告白する時に短い信条として唱えていたと考えられます。

2B キリストの御業

すべてはキリストの御業です。具体的に六つのことが書かれています。第一に「キリストは肉において現われ」とあります。ギリシヤ語によっては、「神は肉において現われた」とあります。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:14)」受肉であります。これは偉大な、私たちを敬虔に至らせる奥義です。キリストが肉体を持たれていることで、この方が私たちの祭司となり、私たちの肉体にある弱さに同情することができます。私たちのとても小さな事柄でさえも、主は憐れみ、助けることのできる方であります。そして肉体を宿しているからこそ、私たちの罪のための供え物となることができになったのです。私たちの罪の罰を、その肉体の上に受けることができたのです。

第二に、「霊において義と宣言され」とあります。これは神の霊のことでしょう、御霊によってイエス様が義と宣言されました。私たちはキリストを信じる信仰によって義と宣言されますが、ここではそういうことではありません。イエス様がなされていることが、神の御霊によって正しいと宣言されていることであります。主がヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のように下ってこられました。そして、聖霊によって数々の奇跡を行われました。そして何よりも、聖なる御霊によってイエス様は死者の中から甦られたのです。死者からの復活によって、この方が言われたことが確かに正しいと証しされたのです。「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。(ローマ 1:3-4)」

第三に、「御使いたちに見られ」とあります。御使いは、神に仕えている霊です。天において、神に仕えています。彼らが最も気になっていたのは何か、誰かと言いますと、イエス様だったのです。「そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。(1ペテロ 1:12)」御使いは、イエス様が誕生された時に、いやその前から気になっていました。母マリヤにその受胎を告知したのは天使長ガブリエルです。そして、イエス様がバプテスマ

を受けられた後、荒野で四十日、何も食べないでいて、それから悪魔の誘惑を受けられました。そこで御使いがイエス様に仕えていた、とあります(マルコ 1:13)。ゲッセマネの園で、イエス様が苦しみ悶えて祈られた時に、「御使いが天から現われて、イエスをカづけた。(ルカ 22:43)」とあります。そして、イエス様が墓から出てきた時に大地震が起りましたが、そこには眩いばかりの衣を来た人が二人いました(ルカ 24:4)。イエス様がオリーブ山から昇天された時も、二人の人がいました。このように、天における焦点はイエスご自身であり、この方のなされる一つ一つのことだったのです。

第四に、「諸国民の間に宣べ伝えられ」とあります。ここで大事なものは、ユダヤ人だけでなく諸国民であること。すべての民に伝えられたという事実です。言い換えれば、神は全ての人のためにキリストを遣わされたということです。神は全ての人を愛しておられます。キリストが死なれるまで神が愛された人で、その価値がない人は一人もいません。ところが、私たちは心で差別を設けています。このような種類の人については、私は興味がない。私はこの人たちには我慢がならないから付き合わない、福音が語られなくてよいと考えてしまいます。しかしイエス様は、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさいと命じられました。

第五に、「世界中で信じられ」とあります。信じるということが強調されています。「ローマ 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」キリストに拠り頼む、その信仰によって人を救う神の力が働きます。またこれは、この世界にいる時に信じなければいけないことを示しています。この世ではなく、次に来る世においては信じる機会是与えられていないのです。死んでからでは遅いのです。

第六、最後に、「栄光のうちに上げられた」とあります。イエス様が昇天されたことです。天におられる父なる神が、キリスト・イエスであれば受け入れることを示しています。イエス様が、「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。(ヨハネ 16:10)」と言われました。天には、イエス様と同じ義を持っていなければ入ることができません。しかし、キリストの内にいる者は、神はキリストにあって私たちを天に導き入れてくださいます。

いかがでしょうか？ イエス・キリストが行われたことだけです。この方にある神の救いのご計画を、しっかりと保持していることです。その中で初めて、世から受ける激しい迫害に耐え、耐えるだけでなく圧倒的な勝利者となることが許されているのです。妥協してはいけません、また偽の教えに対して対峙することができます。どうか、私たちも委ねられたものを守ることができますように。どんな試練を通ってもイエス・キリストの告白を決して捨てず、神の恵みによって教会がむしろ広がっていきますように。